

帝国書院では、地図帳や教科書の編集者を中心に取材班を組み、2023年8月22日から8月30日まで、ベトナムの取材を行いました。その取材成果の中から、今回はベトナムの生活文化を中心としたポスター資料を作成し、お届けいたします。

別途お届けのポスター↓とあわせてご覧ください!



1 日本との関係が深まるベトナム

2023年は、日本とベトナムの間で外交関係が樹立されてから50周年に当たる。両国ではこれを記念して、文化や経済などに関するさまざまなイベントが開催されてきた。両国の関係がますます深まるなか、このたびの写真撮影・取材が決まった。

ベトナムでの写真撮影・取材のテーマは、人々の生活や文化と産業の発展である。これは、経済成長が著しく、日本にとって身近なベトナムの現状を把握し、教科書や資料集などで最新の動向として紹介するためである。特に、衣服や食、注目すべき産業といった観点で撮影地や取材先を決め、滞在日数9日という限られた期間ではあるが、各地を撮影し、ウェブサイトなどには載っていない情報を得ることを目標とした。

ベトナムの国土は南北1,600km以上に及び、面積は日本よりもやや小さい33.1万km²で、およそ9,946万人が暮らす(2022年)。民族は、人口の大半を占めるベトナム人(キン人)と、主に北部や中部の山岳地域に暮らす少数民族から構成される。

取材班3人がベトナムを訪れた8月は、大半の地域が雨季にあたる。出発前に天気予報を確認したところ、ハノイ到着の翌日は大雨の予報であった。しかし、当日は晴れて気温が30℃を超え、強い日ざしが取材班の体力を奪っていった。北部のハノイを離れた後は、南部(カントー、ホーチミン)、中部の高原地帯(バンメトート)、そして沿岸部(ニャチャン)を巡ったが、帰国まで日中に雨が降ることはほとんどなかった。現地の人によると、天気予報は70%の確率で外れるとのことで、雨の予報であれば傘を持ち歩かず、晴れの予報であれば雨が降ると思って行動するのだという。

2 豊富な食材がそろいにぎわう市場

ベトナム南部のメコン川流域では、豊富な水量を生かした水上交通が盛んであり、伝統的に各地の産品を交易する水上マーケット(市場)が形成されてきた。取材班が訪れたカントーのカイラン水上マーケットでは、主に野菜を取り引きする大型船が航行しており、その間を卸業者や観光客のために軽食や飲み物売る小型船が行き交っていた。取材班もフーティウ(米の麺。半乾燥させるため、フォーとは違いコシが強い)を買ってみたが、鮮やかな手つきで盛りつけるようすが印象的だった。かつて盛んだった水上輸送も、陸上交通網が整備された後は陸上輸送に主役の座を譲っており、水上マーケットは観光客向けのコンテンツとなっているとガイドは話していた。日の出の時間を中心に行われると思っていたマーケットの開催時間も、もともとは午前2時ごろから始まり日の出のころまでに終わっていたものを、観光客に配慮してだんだん開催時間を遅くしていったのだという。

水上マーケットを見学した後に、近くにある陸上の市場を見学した。このマーケットは50m×100mほどの広さに何十もの店がひしめき合っている。屋根のある区域には、肉や魚などを取り扱う店が並び、豚が一頭丸々さばかれて売られていた。日本人にはなじみが薄いですが、ベトナムではよく食べられている雷魚などの食材も売られており、この日はなかったが、食用のヘビやネズミが売られる日もあるという。一方、屋根のない区域には、午前中の強い日ざしのなか、シートを広げて、野菜や果物、イモなどを並べて売る人々や、調理器具などの日用品を売る人々がみられた。野菜などを売るのは女性が多く、ベトナムの伝統的な帽子(笠)である「ノンラー」をかぶって接客をしていた。食材を買い求める客は、バイクで訪れる人がほとんどである。市場と同じくらいの広さのある大きな駐輪場いっぱいバイクが止められ、人々はヘルメットをかぶったまま買い物をしている。ノンラーとヘルメットでひしめき合うようすは、まさにベトナムの日常を象徴した風景として印象に残った。

3 稲作と関わりの深い伝統的な料理

ベトナム料理といえば、フォーや生春巻きが思い浮かぶ。これらベトナム料理の多くには、世界有数の生産量・輸出量を誇る米が使われている。

フォーとは米粉でつくった平たい麺のことであり、牛肉や鶏肉が入ったスープに、パクチーなど、たっぷりの香草を入れて食べる。写真④は、ハノイ市内にあるフォー専門店を撮影したもので、このときはハノイの人々に人気がある

牛肉のフォーを食べた。フォーはハノイなど北部が発祥とされ、さっぱりとした味つけが特徴である。南北に長い国土をもつベトナムには地域ごとに名物の麺料理があり、異なる種類の麺や味つけを楽しむことができた。

生春巻きは、南部を代表する料理の一つである。具材を巻くライスペーパーは、現在では工場での機械生産が主流だが、昔ながらの工房での手作りも残っている。写真⑤は、ホーチミン郊外にある工房で取材班がライスペーパー作りを体験させてもらったときのようなすである。水で溶いた米粉を1杯すくって鉄板の上に流し、ふたをかぶせてしばらく蒸し焼きにする。この後の、太い棒に巻きつけ、乾燥させるために網の上に移す作業が難しく、形がゆがんだり、ライスペーパーどうしがくっついていたりしてしまう。網の上に並んだ自分たちのライスペーパーと、職人がつくる美しい円形のライスペーパーとを比べると、その違いは歴然であった。網の上に並べたライスペーパーは、外の壁などに立てかけて十分に乾燥させる。一連の作業は、午前2時から準備を経て、午前5時から焼き始め、午前中のうちに終わる。取材で訪れたのは午前10時前で、すでにたくさんのライスペーパーが乾燥の段階に入っていた。

この工房では、1日あたり1,000~1,200枚のライスペーパーが生産されているという。しかし、職人によると、「あと10年もすれば、このような手作りの工房はなくなってしまおうだろう。」とのことで、ベトナムの伝統産業も後継者不足の問題を抱えていることがわかった。

4 生産量世界第2位を誇るコーヒー

ベトナムが世界的な「コーヒー大国」であることは、日本で知られてはきているが認知度はあまり高くない。ベトナムのコーヒー豆の生産量は184.5万t(2021年)、輸出量は121.8万t(2021年)であり、どちらも世界第2位を誇る。世界で栽培されているコーヒーの品種は、主にアラビカ種とロブスタ種の2種類であるが、ベトナムで主に栽培されているのはロブスタ種で、比較的涼しく、昼と夜の寒暖差が大きい中部高原での栽培が盛んである。ロブスタ種はアラビカ種に比べて酸味が少なく、苦みが強いのが特徴であり、価格が安い。そのため、日本ではインスタントコーヒーや缶コーヒーの原料となることが多く、高価なコーヒー豆として販売されることが少ない。多くの日本人にとってベトナムのコーヒーに耳なじみがない原因は、ここにあるのかもしれない。

今回の取材は、中部高原のバンメトート近郊のコーヒー農園に協力してもらった。この地域では主に少数民族の農家が、手作業での栽培を行っている。取材先の農家は夫婦

と子供3人の5人家族で、2.8haの畑(コーヒーの木にして約2,800本)を管理している。年間でコーヒー豆を約4t収穫でき、利益は日本円で70万円ほどだという。しかしこの収入では子どもを高校まで行かせるのが限界で、なかには小さい子どもを学校に通わせられない家庭もあるという。バンメートには、このような農家の支援を行うコンサルティング会社がある。今回のコーヒー農園への取材は、この会社を通して行うことができた。この会社は、農家への指導や助言、レインフォレスト・アライアンス認証(原料が持続可能性の強化につながる手法を用いて生産されたもの)などの国際認証取得の援助などを行っており、さまざまな国・地域のコーヒー団体・企業とのつながりもっている。農家支援の担当者は、農家から農家へと走り回る日々だという。

コーヒーの木には3月ごろから緑色の実がなり、11月ごろに赤く熟して収穫の時期を迎える。収穫されたコーヒーの実の仲卸を通して加工工場へ集められる。加工工場では洗浄と選別が行われ、1tごとの袋に分けられて世界に輸出されていく。仲卸が介在することで、農家の取り分が減り、それが先述のような農家の貧困につながる原因の一つであると加工工場の方が教えてくれた。

ベトナムのコーヒーを語る上で、生産の面だけでなく、消費の面も忘れてはいけない。ベトナムでコーヒーが栽培されるようになったのは、フランスによって植民地化された1920年ごろからといわれているが、同時にフランスのカフェ文化も定着することとなった。このため、今もベトナムの街には多くのカフェがあり、時間ができると家族や友人とカフェでくつろぐのが定番である。そこではいわゆる「ベトナムコーヒー」が飲まれている。「ベトナムコーヒー」は、フィンとよばれる器具で苦めのコーヒーを抽出し、甘い練乳を入れて飲むのが伝統的なスタイルとなっている。牛乳が高価で手に入れることが難しかったころ、代わりに練乳を入れたのが始まりといわれている。ほかにも練乳と卵黄を入れた「エッグコーヒー」が、昔からの飲み方として親しまれている。もちろん今は、牛乳も国内のグラットなどで生産され、スーパーマーケットでも売られており、ミルクコーヒーも飲まれている。また、ヨーグルト、アボカドなどさまざまなものを入れることで、新しい「ベトナムコーヒー」も広がっている。次に来るコーヒーのトレンドはここにあるのかもしれない、などと空想が膨む「コーヒー大国」ベトナムであった。

5 世帯保有率80%以上！世界有数のバイク天国

日中にベトナムの街を歩いていると、活気に満ちあふれ

ているようすを感じることができる。その理由は、街を行く人たちや聞こえてくる屋台の売り文句、露店のフォーやバインミー、コーヒーの匂いなどさまざまだが、常にバイクが駆け回り、絶え間なくクラクションが聞こえてくるのも要因の一つだろう。都市の交通インフラの整備が課題となっているベトナムでは、今もバイクが交通の中心となっており、登録台数は2022年で約5,000万台(ベトナムの人口は9,946万人)となっている。18歳になると無条件で50cc以下のバイクに乗れるようになり、都市圏の大学生などは誕生日と同時にバイクをプレゼントされることもあるという。

このような環境で、ハノイやホーチミンなどでは「バイクの奔流」ともいえるような状態になっており、信号が変わるたびにバイクが押し寄せてくる。その中で鳴り響くクラクションやライトのパッシングは警告ではなく、自車の存在をアピールするための行動なのだと感じた。歩行者もこの交通状況には慣れたもので、平然と道を渡っていたが、コツは「渡りたい方向に腕を出し、一定の速度でゆっくり歩く」ことだと現地の人から教えてもらった。

ベトナムでは、「ホンダ」といえばバイクのことを指すほどホンダ車が人気で、そのシェアは80%近くにも上る。特にカブタイプが普及しているが、若者や女性の間ではまたがらずに乗れるスクータータイプが人気となっている。ここ数年での新しい動きとして、写真⑧の最前列、紫色の服の人のような、日焼け対策を万全に行った女性が現れるようになった。彼女たちはスクーターの「リード」に乗っていることが多く、独特な格好をしていることから「ニンジャ・リード」とよばれている。

6 ベトナムを象徴するアオザイとノンラー

ベトナムの女性の伝統衣装姿といえば、やはりアオザイにノンラー(帽子)をかぶった姿を思い浮かべるだろう。今日、アオザイは高校の卒業式、結婚式などのイベントの際に着られたり、南部では高校の制服になっていたりする。また、レストランの店員や航空会社のキャビンアテンダントなどが着用しているのを目にするが、街で一般の人々が日常的に着ることは、ほとんどなくなっている。ベトナムでも友人らと「映える」写真を撮ってSNSに投稿することが流行しており、その際にアオザイを着用することもある。アオザイと一口にいっても、歴史とともに少しずつその形を変えている。写真⑩の左の女性が着ているものは伝統的な形に近いもので、右の女性のもは丈が短く、モダンにアレンジされたものとなっている。

一方で、ノンラーはアオザイと比べると日常的に見かけることが多い。特に街の行商、郊外で農作業をしている女

性に多い印象だった。円錐型のは女性用で、男性用は麦わら帽子のような形をしている。しかし、男性が女性用をかぶっている姿はおろか、男性でノンラーをかぶっている人は、一度も見かけなかった。写真⑪は伝統工芸などを紹介する施設で、ノンラー作りを実演しているようすである。木枠で固定した竹ひごにやしの葉を編み込んで作る。観光用に写真のようなカラフルなものも作られており、大きさにもよるが、街の土産物店などで200～1,000円ほどで売られている。

7 中国やフランスの影響がみられる町中のようす

ベトナムはその歴史のなかで中国やフランスの文化を受け入れたため、街並みや伝統文化に多くの影響をみることができる。例えばフランスの影響として、ハノイやホーチミンでは、仏領インドシナ時代のコロニアル様式の建造物が残されており、ベトナムの若者たちの間で「映え」スポットとして人気となっている。ベトナムを代表する食べ物バインミーには、フランスパンが使われていて、外はサクサク、中はふんわりとした食感で大変おいしかった。

一方、中国から伝わった文化は、年中行事に色濃く残っている。取材班が訪れた8月下旬には、旧暦の中秋節(2023年は9月29日)を祝うための屋台が至る所に出ていて、中秋を祝うための提灯飾りや月餅が所狭しと並び、販売されていた。元来の中秋節は、日本でいう「端午の節句」のような子どもの日だったが、近年はハロウィーンのように若者が仮装して出歩くという日によって変わってきているという。ほかに中国の影響を感じたのは、仏教と道教が混じった様式の寺院があったり、都市名や人名の漢字表記が残っていたりすることであった。

多民族国家であるベトナムでは、少数民族のもっていた文化も現在に残っている。歴史的に独立していた時期の長い、ベトナムの中部高原から南部にかけての地域では、少数民族が使っていた地名がそのまま使われていることが多い。取材班の訪れたカントーやバンメート、ニャチャン、ホーチミンの旧名であるサイゴンなどもその例である。ベトナム航空では、少数民族の踊りや音楽を取り入れた機内安全ビデオを放送しているなど、多様な文化をみることができ、非常に興味深かった。

おわりに

取材班は3人ともベトナムを訪れたのは初めてで、ハノイやホーチミンといった都市での活気あふれるようすにベトナムの勢いを感じた。また、人々は優しく、将来の希望を

実現するために努力をしている姿が印象的であった。若い世代が多いベトナムは今後も大きな成長を遂げていくであろう。しかし、現地の人々は経済発展とそれに伴う豊かさをあまり実感していないようで、農村部では収入が少なくて貧困から脱却できない人も多いという。日本にいるとベトナムがこのような問題を抱えていることを想像しにくいですが、現地の人々から直接話を聞くことで多くのことを知ることができ、とても勉強になった。さらなる発展が期待されるベトナムに今後も注目していきたい。そして、再度ベトナムを訪れ、その変化を自身の目で確認したい。